

TGF×FGF

●TGF(東京大学原発災害支援フォーラム)は、原発災害について一般市民に適切な情報を提示するために結成された、東京大学教員有志による組織。世話人は、押川正毅氏、影浦峽氏、亀頭秀一氏、島蘭進氏、中西徹氏、福田健二氏、安富歩氏。ウェブサイトは <http://311tgf.org>

●FGF(福島大学原発災害支援フォーラム)は、原発災害について議論するための福島大学教員有志による組織。ウェブサイトは <http://fukugenken.e-contents.biz>

副読本、配ります

現在、「放射線と被ばくの問題を考えるための副読本」を作成しています。これは、低線量被曝の健康影響に関する既存見解を整理しつつ、安全論者による偏った情報に振り回されないようにするための考え方をまとめたものです。

内容は、福島第一原子力発電所事故の経緯をまとめたのち、放射線の基礎知識、懸念される健康影響、リスク負担の公平性についてわかりやすく説明しています。また、巷でよく耳にする、放射線と被曝の問題に関する見解について、その妥当性を考えるヒントを掲載しています。

副読本は、2012年3月25日のシンポジウムにて配布する予定です。



福島大学へのアクセス

★電車【東京方面より】

「東京駅」より東北新幹線にて「福島駅」下車
(所要時間約1時間40分)
「福島駅」よりJR東北本線「金谷川駅」下車 徒歩8分
福島駅から2つ目(所要時間約10分)
郡山駅から8つ目(所要時間40分)

在来線時刻表(一部)
福島12:24→金谷川12:33
郡山11:56→金谷川12:32

★電車【仙台方面より】

「仙台駅」より東北新幹線にて「福島駅」下車
(所要時間約30分)
「福島駅」よりJR東北本線「金谷川駅」下車 徒歩8分
福島駅から2つ目(所要時間約10分)

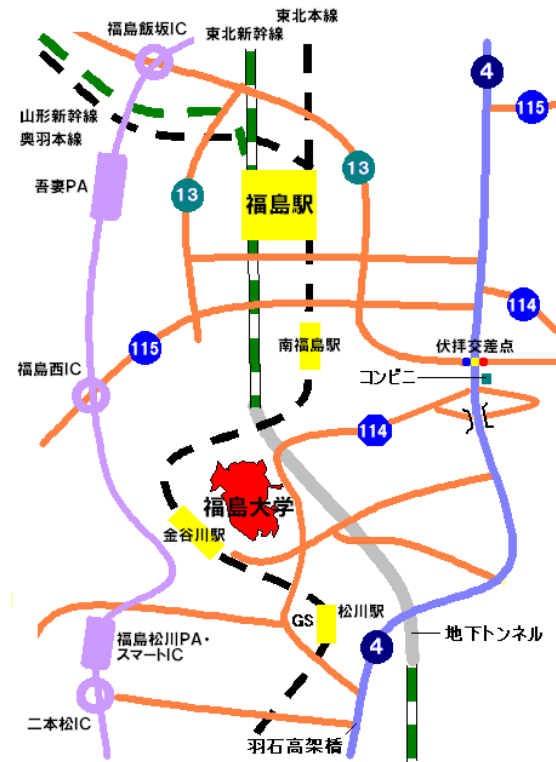
★高速道路【東京方面より】

「川口JCT」より東北自動車道にて
「二本松IC」まで約236km
「福島松川PA・スマートIC」まで約245km
「福島西IC」まで約255km

自家用車でお越しの方へ
正門から入構してください
(金谷川駅側からは入れません)

★高速道路【仙台方面より】

「仙台宮城IC」より東北自動車道にて
「福島松川PA・スマートIC」まで約88km
「福島西IC」まで約78km



★当日は、大学内の生協食堂をご利用できます
(営業時間 11:00-14:00)

お問い合わせ

福島大学 経済経営学類支援室 〒960-1296 福島市金谷川1番地
電話:024-548-8353 (平日9:00 - 17:00)
電子メール: keizai@adb.fukushima-u.ac.jp



特別講演&シンポジウムのご案内

主催:福島大学経済経営学類
共催:福島大学経済学会

3月25日 13時開場
於 福島大学

放射能災害と被曝リスク

～原発事故から1年、
リスクはどう語られてきたか

プログラム

特別講演①「原発災害と医学者の倫理」	【13:30-14:10】
講師: 島蘭進氏(東京大学大学院 教授)	(40分)
	休憩:5分
特別講演②「原発災害後の報道と専門家の発言」	【14:15-14:55】
講師: 影浦峽氏(東京大学大学院 教授)	(40分)
	休憩:10分
パネル・ディスカッション①「余計な被曝をいかに避けるか」	【15:05-15:50】
	(30分+会場からのご意見 15分)
パネリスト:影浦 峽(東京大学) 島蘭 進(東京大学)	
& 遠藤 明子(福島大学) 小山 良太(福島大学)	休憩:10分
パネル・ディスカッション②「被曝リスクの公平性を考える」	【16:00-16:45】
	(30分+会場からのご意見 15分)
パネリスト:影浦 峽(東京大学) 島蘭 進(東京大学)	
& 後藤 忍(福島大学) 永幡 幸司(福島大学)	

開催情報

場所:福島大学 金谷川キャンパス 共通講義棟L4教室

日時:2012年3月25日(日) 13:00より開場

参加費&申し込み:不要(どなたもご自由にお越し下さい)

お問い合わせ:福島大学 経済経営学類支援室

電話:024-548-8353 (平日) 電子メール: keizai@adb.fukushima-u.ac.jp

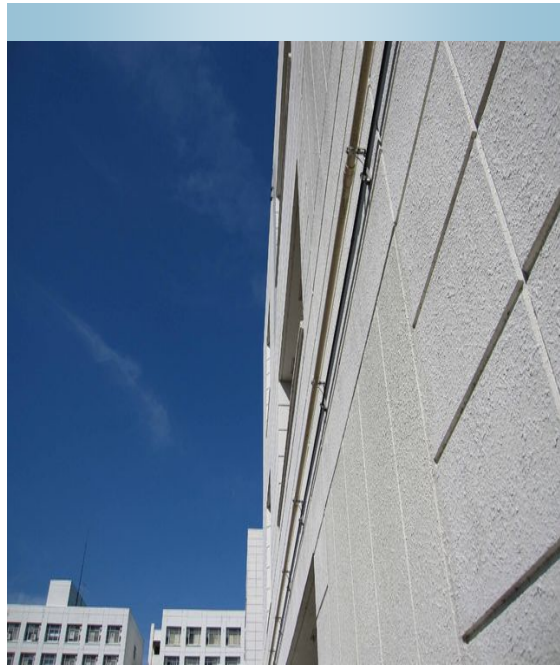
目次

開催にあたって.....	2
講師紹介.....	2
パネル・ディスカッション内容.....	3
パネリスト紹介.....	3
副読本、配ります.....	4
TGF×FGF.....	4
会場へのアクセス.....	4

主なキーワード

- 低線量被曝は安全?
- 政府、専門家、メディアはどうあるべき?
- リスク負担の公平性とは?
- 信頼関係の再構築?
- 1mSv、それとも20mSv?
- 風評被害?
- 自主避難?
- 除染すれば大丈夫?
- 内部被曝の検査は?
- 汚染食品の基準は?
- 余計な被曝はできるだけ避けるべき?
- 悲劇を繰り返さないために





シンポジウムの開催にあたって

2011年3月11日の東日本大震災により、福島第一原子力発電所が爆発・・・

福島県をはじめ、広大な地域が放射性物質により汚染されました。それにより、多くの住民が、一般人の追加被曝線量(医療除く)限度である年間1mSvを超える地域での生活を余儀なくされています。

当初、東京電力はもちろん、政府やメディア、そして専門家は、こぞって「安心・安全」を強調しました。しかし、100mSvを下回る、

いわゆる「低線量被曝」の健康影響については、専門家のあいだでも意見が分かれているのが現状です。

危険性が必ずしも明らかでない状況下において、政府やメディア、専門家はどのように情報を発信すべきなのか。

「がんばろう福島」という威勢のよい掛け声に押され、慎重な言葉を口にしない日々・・・。

みなさんと一緒に、この1年間を振り返りながら考えてみましょう。



数年前、福島大学の近くを散策中のある日。のどかな美しい風景そのものは、きっと今も変わらないのだろう・・・

—— いたずらに安全・安心を強調するほど、人の心は離れてゆく。

講師 & パネリスト

●島 蘭 進 (しまの すずむ)

宗教学者。東京都出身。東京大学大学院人文社会系研究科教授。著書に、『国家神道と日本人』(岩波新書)、『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』(岩波書店)、『いのちの始まりの生命倫理—受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』(春秋社) などがある。TGFのメンバー。

●影浦 峯 (かげうら きょう)

言語学者。北海道出身。東京大学大学院教育学研究科教授。著書に、『The Dynamics of Terminology』(John Benjamins)、『ソシユール一般言語学講義 コンスタンタンのノート』(東大出版会)、『3. 11後の放射能「安全」報道を読み解く』(現代企画室) などがある。TGFのメンバー。

講師の方々

島 蘭 進 先生のご専門は宗教学、宗教史です。死生観や生命倫理、人間の尊厳について研究されており、医学者との交流も深く、放射能汚染が及ぼし得る健康影響の問題に対する科学者のあり方を問われています。

影浦 峯 先生のご専門は言語学、情報学です。原発事故以降のマスメディアの情報発信や専門家の発言について疑問を持たれ、万人に分かりやすい例えを交えつつ問題点を整理されています。

福島第一原子力発電所の爆発事故により、美しい郷土が放射能汚染に晒されながらも、周りは安全論一色となり、私たち福島大学教員(の一部)は当初ひどく不安のなかにありました。そのようななか、島蘭先生と影浦先生は、いち早く私たちの心情や考えにご理解を示して下さい、適切なアドバイスを寄せて下さいました。

また、島蘭先生と影浦先生は、東京大学柏キャンパスの環境放射線レベルに対する大学当局の安全側に立った姿勢に疑問を持たれ、東京大学教員有志とともに、総長へ要望書を提出されました。そして現在は、東京大学原発災害支援フォーラム(TGF)のメンバーでもあります。

最近では、2012年2月28日に、河出書房新社より、「低線量被曝のモラル」(共編著)が出版されました。そのなかで島蘭先生は、放射能の健康影響に対する科学者のあり方について、市民との健全な信頼関係の改善・構築という観点から議論を展開されています。また、影浦先生は、メディア及び専門家による「安全の語り」を通じて、いかに「本来の責任所在」が曖昧化されるに至ったかを論じておられます。

パネリスト

●遠藤 明子 (えんどう あきこ)

専門はマクロ・マーケティング論、商業論。東京都出身。福島大学経済経営学類准教授。震災以後、子供やその親たちが少しでも被曝を避けられるよう、線量の低い地域で「保養」させるプロジェクトに参加している。FGFのメンバー。

●小山 良太 (こやま りょうた)

専門は農業経済学。東京都出身。福島大学経済経営学類准教授。「何よりもまず土壌汚染の度合いを詳細に測るべき」と、事故直後より主張。自らも汚染地域に出向き、調査を行っている。FGFのメンバー。

●後藤 忍 (ごとう のぶ)

専門は環境計画論。大分県出身。福島大学共生システム理工学類准教授。低線量被曝のリスクについて、科学的かつ倫理的に整理し、「放射線と被ばくの問題を考えるための副読本」の作成を中心的に担っている。FGFのメンバー。

●永幡 幸司 (ながはた こうじ)

専門はサウンドスケープ論。京都府出身。福島大学共生システム理工学類准教授。原発事故後まもなく福島大学学長より発表された「安全メッセージ」に対して、いち早く、その科学的妥当性を検討した。FGFのメンバー。

パネル・ディスカッション

パネル・ディスカッションは、第1部と第2部に分かれています。

第1部では、「余計な被曝をいかに避けるか」をテーマに議論します。低線量被曝に晒されている住民にとって、生活環境や口にするものの汚染レベル、住民自身の内部被曝状況などを知るための手立ては、まだまだ不十分です。また、長期あるいは一時的な自主避難者に対する公的支援もありませぬ。そのようななかで、市民が被曝を少しでも避けるためには、どうすればよいのか。市民の活動、生産者の動き、そして行政の対応。実際の現場で起きている様々な事例を交えながら、みなさんとともに考えていきます。

第2部では、被曝リスク負担の公平性について議論します。そもそも、「環境リスク学」の専門家による被曝リスクの評価は正しいのでしょうか。仮にそのリスクが些細なものだったとしても、それを放射能汚染地域の住民が負わなければならない正当な理由はあるのでしょうか。そして何よりも、一般人の追加被曝線量限度である年間1mSvが確約された生活を営む権利は、どこへ行ったのでしょうか。みなさんとともに考えていきます。

2つのパネル・ディスカッションの根底には、ある共通のキーワードがあります。それは、**持続的な信頼関係の再構築**です。支援する側とされる側、食の生産者と消費者、科学者やメディアと市民、そして政府と住民・・・これらの信頼関係をいかにして取り戻し、築いていくのか。会場のみなさんからのご意見も、大いに歓迎いたします。